

二回生 木村久夫先輩のこと

再度寄稿にあたって

十四回生 柿崎 眞吾

昨年二〇一四年四月二九日、東京新聞が大きな特種で木村久夫先輩の遺書がこれまで一通と思われてきたのが二通であったことが報じられました。その年の九月二七日の東京千里山会総会で事務局がこの新聞を会場に貼り出し来場の皆様に伝えられ、佐井寺・千里山を中心に育った私たちは吃驚しました。

その後八月二八日、文化部長加古陽治編著「学徒兵木村久夫の二通の遺書 真実のわだつみ」により、二通の遺書全文が掲載され、さらに今年四月二八日、上官で信頼の厚かつた鷺見豊三郎著（2009年逝去）による「わだつみ現場の証言或る傍観者の記録」が刊行され、昭和十八年十月から敗戦後の昭和二十一年裁判までのカーニコバル島の生きた現場と戦争裁判を知ることができました（二書とも東京新聞社刊）。本寄稿に当たり相当部分をこれらに依拠させていただき感謝申し上げます。なお文中「ご当人様」と「遺族の皆様、関係のお方々様」の敬称等につき省略させていただきお赦し願ひ上げます。

英軍の反撃と原地人の離反内通はじまる

悲劇的なのは太平洋戦線の戦局悪化と重なったことでした。当初破竹の勢いで獲得したこの地方の制海権と制空権は月を追うごとに衰えていきました。

太平洋では一九四三年初頭からアッツ島、ガダルカナル島に始まる対米戦の敗報が相次ぎ、印度洋は英国にとつて大英帝国時代から一大勢力圏を誇っていました。たから面子の取り戻しを狙ってカーニコバル島の奪還作戦を開始します。

しかし日本軍の玉砕戦法を研究し、上陸作戦を採らずに陸戦を避け海空からの砲撃主体の消耗戦に徹します。第二飛行場ができあがった一九四四年秋には海軍の零式戦闘機も次第に減ってついに零となり、飛行機のいない飛行場になっていました。すぐ海の向こうのビルマでは、英領インパールへ十万の将兵を向けながら五万の兵士を失う大敗北が起っていました。

カーニコバル島からの撤収作戦をとれなかったのは絶対国防圏の西側最前線だったからで、逆に連合軍の手に落ちて使用された場合は直ちに日本の敗戦に繋がるからでした。玉砕か餓死か、かつての宗主国との内通も疑心暗鬼のところ日本軍のなけなしの米を原地人が盗んだことが発覚したのは一九四五年七月初頭のことです。芋蔓式の取調べが始まりました。

大本営御前会議で絶対国防圏と決定

第二次世界大戦では、戦闘は太平洋だけではなく、印度洋でも戦闘はおこなわれました。一九四一年開戦まもなくインドシナ半島・インドネシア諸島を制圧した日本軍は、ビルマ（現ミャンマー）に攻め込み印度洋に進出を果たしました。これらの占領地の海の通路である南シナ海・マラッカ海峡・印度洋に達する制空権の確保に選んだのが、スマトラ島北端から北西五〇〇キロの印度洋に浮ぶ英領ニコバル諸島の北端カーニコバル島でした。精々淡路島を円くしたぐらいか、高い山がなく飛行場をつくりやすい地形の島で、原地人の六〇〇〇人と印度人二〇〇〇人が住んでいました。

一九四二年日本陸海軍は無血上陸し、飛行場づくりに成功します。翌年一九四三年九月大本営は御前会議で、西側の死守すべき「絶対国防圏」と決定します。日本は独立混成旅団六〇〇〇人で右の諸地域を俯瞰できる制海権・制空権を確保し、海軍は零式戦闘機十数機を配備し、印度洋の不沈空母を目指してこの年第二滑走路の建設に着手します。

木村久夫は敵性語の英語に堪能で、早速原地語も習得するという希少な兵卒でした。カーニコバル島の原地人も占領軍兵士として親しく交わることができて、通訳として二名の本職に加えられることになりました。

通訳が調査尋問の最前線に立つ破目に陥る

調査に欠かせないのが言葉です。英語も原地語もできる木村久夫は他の二名の通訳とともに英軍への内通調査の最前線に立たされたのは当然の流れで、成果も抜群でした。取調べは尋問が詰問となり、上官からは自白を取るために時には打撃も必要と強要されました。殴り蹴る役は別の将兵でも、憶えられるのは尋問で言葉のやりとりをした通訳の顔と名前でした。

敗戦直前の七月五日、遂に英軍の大規模機動部隊襲来戦艦2・大型空母2・巡洋艦・駆逐艦その他小型艦艇合計40隻が島を包囲し、海空からの猛砲撃で狂乱状態になっていた島では、内通者と思しき者の殺害が目的化し、七月二九日、八月六日、十二日に八五人の原地人が軍律裁判抜きで日本軍の参謀を首領とする将兵により銃殺・刺殺・斬首が行われました。

敗戦が伝えられたのは八月一六日の昼頃でした。全軍の玉砕は免れました。英軍は無血上陸し、十月二四日に日本軍の武装解除が行われました。

多数の死者を出したのは原地の島民

戦争裁判はこの問題が中心となって動き出しました。戦時の敵国への内通者の殺害はそれなりの裏づけが必要なのは当然で、日本軍は軍律裁判をしたことにする架空の隠密工作で巧みに切り抜けることに成功し

ました。その中には紛らわしい虐殺が含まれていても「死人にくちなし」で、日本軍の内部では真実を語ることを禁じたり、虚偽の陳述を強要したり、免罪のための醜悪な命令や行動が横行していました。なにぶん日本軍・原本人それぞれ六〇〇〇人の中からの割り出しは至難の業で、原本人の証言に頼るほかありません。

裁判はシンガポールに移されて行われました。

日本軍の現地の武装解除から調査に始まり裁判の結果まで五ヶ月間というスピード裁判です。処刑に関与していない末端の兵卒通訳三名中三名が拷問という名の罪で極刑となった悲運は覆いがたいものがあります。

階級別に見た裁判結果の不条理を視る

将官(旅団長) 銃殺刑

佐官 三名 有期刑 一名無罪

尉官 二名 有期刑

下士官 二名 絞首刑 二名 有期刑

兵卒 一名*絞首刑 二名 有期刑

通訳 二名 絞首刑

(*印木村久夫 各行姓名と有期年数省略)

一九四六年三月二十六日 死刑宣告 同年五月二十三日 執行

戦犯裁判は連合国軍の報復の色彩を帯びていました。英軍による杜撰な裁判の惨憺たる判決結果から、佐官が計画命令しているにも係らず死刑を免れている

こと、責任が下士官以下と旅団長に転嫁されていることが分かります。とくに一名の無罪の佐官は、旅団長に替わって指揮を執った首領の参謀でした。

後年、法務省の調査(昭和三七年)で当時の将校の「真相で裁判に臨んだならば、五〇人くらいの被害者(戦犯人)が出ないとも限らなかった」との口述でも判るとおり、木村久夫ら三人の通訳と二人の下士官の五人の死刑囚は、日本軍の贖いの山羊にされた結果がはつきり示されています。旅団長は全軍の指揮官として責任を執りました。刑は絞首刑より軽い銃殺刑に服し、戦犯人が最少人数に止まったことを喜悅していたことが知られています。

木村久夫は上告のない裁判ですが真相表明と不合理性を英文の請願書で訴えたが退ぞけられ、チャンギ刑務所の二ヶ月間に不朽の獄中記を残しました。

或る遺書についてときけわだつみのこえ

会誌二号の新潮 昭和二三年六月号「或る遺書について」の寄稿者 塩尻公明は木村久夫にとつて、旧制高等学校時代の哲学の恩師で生涯の最も深い師弟関係の間柄でした。昭和四四年神戸大学名誉教授として逝去。

新聞によって公開されたのは、遺書はもともと二通書かれ、遺品とともに父上の木村久に届けられていま

した。そして二通は塩尻にも知らされました。一通は死刑宣告後、上官の鷺見豊三郎元大尉から頂いた田邊元著 哲学通論の余白に書き綴ったもの、もう一通は手に入れた紙六枚を私製原稿用紙にして書かれたもの、これが新しく公開された遺書で初めから遺品とともに遺族のもとに在りました。

昭和二三年新潮社から寄稿を求められていた塩尻は、父上の意見や希望も考慮にいれ、実際は倍する分量があったのですが、長文の遺書二通を一体的に捉えて編集しました。一部削減や短歌の置換えを行い、最愛の教え子への思い入れを加えて人間木村久夫を画いたものが「或る遺書について」です。

善意の編集によることは周知のとおりで、恩師の切々たる文章は読者に深い感銘を与えました。

恩師の編集文の遺書の部分が、恰も木村久夫の遺書全文の真筆のように歩き出したのはここから始まりません。これがその後の出版社の下敷きになりました。

昭和二四年、東大消費生活協同組合出版部が全国戦没学徒の手記を集めて出版することになり、題名を全国から募集して、「きけ わたつみのこえ」(以下わだつみ・海神とか海の意として大きな反響を呼び、二十万部を突破しベスト・セラーとなりました)。

木村久夫の遺書がわだつみの掉尾を飾ってきたこ

とは千里山会員の皆様ならご存知のとおりです。

その後父上も塩尻も亡くなられて、出版社も光文社さらに岩波書店へとわたり、当初から六六年の歳月を経て岩波文庫が二七版を重ねて今日に至っております。或る遺書についてときけわだつみのこえ 共に編集の際の削減・加筆・置換えなどが行われたものを読者は七〇年近く真筆と思ってきたわけで、それ自体が特種で出版界の椿事となりました。

削除されていた重要箇所は、軍閥政治が天皇の大権を濫用してまで戦争国家へ驀進させ亡国を招いたこと、日本陸軍の体質品格の痛烈な批判等です。

木村久夫は自らの死を歴史の一齣として受け入れ、日本は敗戦を猛省して若い人達の力で必ず立ち直り、明るい未来を確信していたことが、国民的遺産として紹介されました。

辞世の置換えが二書とも行われた

二八歳人生最後のものだけに特筆しました。あらためて公開された真正の辞世二首です。

風も風ぎ雨も止みたり爽やかに朝日を浴びて明日はいでなむ心なき風な吹きこそ沈みたるころの塵の立つぞ悲しき

風も風ぎ・・・は後述の置換え二首の一首にも収められており格調の高い歌です。

心なき・・・は刑死の寸前まで運命に立ち向かって

こられた勇者の間らしい一首と存じます。こころの塵は生涯を学究の道で日本のために働くことが閉ざされる無念さ、跡取りになる妹に好い婿殿を迎えられますように等々の万感が詠みとれます。

わだつみに載っている置換えた短歌二首です。
おののきも悲しみもなし絞首台母の笑顔を抱きて往かむ

風も凧も止みたり爽やかに朝日を浴びて明日は出でまし
心なき・・・の歌を、おののきも・・・の歌に置換えました。塩尻公明によって息子の受難の死が世に出ることになり、丈夫らしく従容として死を受け入れたイメージを残したいとの父上の意向を受けて編集された可能性が取り沙汰されています。敗戦から間もない時代の熱い親心が察しられます。

真正が世に出たことはありがたいことでした。
風も凧も・・・の終わりの二字に手が入っています。

会誌二号の内容は、日経新聞で歌人道浦母都子の記事が契機で「ある遺書について」の全文を読んで感動し「きけわだつみのこえ」もあらためて読み直して纏めたものです。会誌三号では、孝子令妹から頂いたご丁寧なお礼のお手紙全文を掲載いたしました。

お手紙の一部をこの稿の最後に原文のままゴシックで載せさせていただきます。

結び

木村久夫は大正七年（一九一八年）四月九日、大阪府千里村佐井寺に木村久・斐野の長男として生まれました。木村家はもともと淀藩の家老で、明治維新の前に武士を返上して大阪船場で呉服屋を営み成功して大店となり、二代目のとき店をたたくで佐井寺の庄屋の家を買って移り住んだのが始まりです。

父上木村久は千里村村長（片山・佐井寺）後の千里山住宅地大半を含む）を務め、久夫は大地主の裕福な家庭に妹の孝子と二人兄妹として育ちました。久夫は八ヶ月の早産だったこともあり虚弱で、学校に通うのもままならなかったほどでした。久夫の小学校時代は、まだ千里小学校分校の複式学級時代で校舎も定まらず、五年生になるとき分校から独立、現在の千里第二小学校となり、昭和六年三月に二回生として卒業しました。

久夫には当時煙の都とも言われていた大阪市内の中学校は無理で、茨木へは電車の便もまだ良いとはいえず、いっそのこと大正時代末期にできた豊中中学（現・豊中高校へ進むことに決め、一家四人ごと豊中へ家を構えて久夫の在学中住むことにし、父久はそこから役場に通いました。千里山住宅も発展し一時木村家の別宅もありました。木村家が格段の素封家であったことが拝察できます。後年会誌二号を編集している時

孝子から「私は千里第二には進めず豊中の小学校に入学し卒業しましたの」とのお話を伺いました。

久夫の豊中中学時代は短歌が好きで生涯の伴侶としたこと、英語は得意で外人のG先生とは日本語を使わずに大概のことは話せたこと、カメラに凝って自宅内でDPEができたことなどが残っており、虚弱だった千二小時代に比べ少年期から青年期にかけては自由で充実した中学校生活を満喫できたようです。

皮肉にも死を前にした五十首を超える短歌は遺書を格調高いものとし、英語力に秀でていたことは逆に命取りになり、カメラ好きは短い生涯に多くの貴重な写真を残すことになりました。

旧制高知高校に合格し、母上斐野と孝子も豊中から高知に転居し、一年間の寮生活のあとは共に暮らして自宅通学し、孝子は高知で高等女学校生活を送ります。久夫が通った頃の旧制高校は、長い歴史の最後のよき時代が終わろうとしていましたが、まだマントスタイルの自由性は残っていました。好きな学問をしたいだけにしてよい雰囲気があつて、家庭的にゆるされる者の中には留年する者もあり、久夫もこの中の一人でした。文系は哲学・文学などに憧れる時代で、ここで塩尻公明教授との出会いがあり、生涯の最も深い師弟関係が生まれました。進路の指導も受けました。

京都帝国大学経済学部に進学、母と妹は佐井寺へもどり、久夫は紫野ではじめての下宿生活に入りました。父の望みは高等文官試験を受けて官僚になる道でしたが、自分の望みは経済学徒になって研究者の道を行くことにありました。先年の徴兵検査で第二乙種だったこともあり、いささか楽観していたところ太平洋戦争の勃発で状況は変わり召集令状を受け、大阪二三部隊に入営し、学究の道は閉ざされることになりました。

大東亜戦争が始まりました時「この戦争は負ける」と言っており、だったので、応召になり家を出ます日に「こんな負け戦さに行くのは厭だな」と申しました。軍隊を大変嫌っており、その時言っており、が意志を貫きました。

昭和十八年九月に「通訳として外地に往くから」と二泊三日で帰ってきました、その時千二小学校の前を通り駅まで見送りましたが、まさか永遠の別れになるうとは思いませんでした。温かい性格でしたから可愛がってくれました事を想い出します。中略

此の度は本当にありがとうございます。厚く御礼申しあげます。嬉しゅうございます。

（一九九九年五月三十一日）

了

これは、柿崎さんが木村大先輩のことを2号に、それを読まれた木村氏の令妹が3号に書かれたきつかけとなった道浦母都子さんが、再び今年の6月の日経新聞に何回か連載で書かれたものの一部です。和歌山県出身で、高校生時代を佐井寺(過)され、北野高校へ。現在は歌人として、千里ニュータウン 青山台にお住まいです。

のなれど書いて偲びぬ明日のごう字を
木村 久夫

忘れがたい一首といわれ
なつて、この歌が浮か
べた。

『おけ わだつみのいそ
—日本戦没学生の手記』
(現在は岩波文庫など)を
手にしたのは、高校時代。

図書館で見つけ、家に持ち
帰り、「一気に読んだ。当初、
『日本戦没学生』とこの言
葉の意味がよくわからな
かったが、読み進むうちに
『学徒兵』と呼ばれる慰
塗中で戦場に赴き、生命を
失った人たちのことだと理
解した。

学生の立場なのに戦場こ



道浦 母都子

いかなければならなくな
り、ついには死に至った人
たち。その心情を細かく描

戦没学生の無念 処刑を前に「明日」を偲ぶ

いた二人が、先述の木村久
夫氏である。
彼は大阪府出身、昭和十
七年四月に京都大学経済学
部に入學。その年の十月に
入營。戦争終了後、シंगा
ポール・チャーキー刑務所
で、戦犯として刑死。二十
八歳の死である。

「私には死に至らな
く、学
半ばにしてこの世を去る運
命を誰が予知し得たであら
う。」私は何ら死に値する
悪をした事はない。悪を遂
したの他の人々である」

負けたのである」私は死
刑を宣告せられた。誰がこ
れを予測したであろう。年
齢三十に至らず、かつ、学
半ばにしてこの世を去る運
命を誰が予知し得たであら
う。」私は何ら死に値する
悪をした事はない。悪を遂
したの他の人々である」

「三日なり」と記しているが、
別のところでは命日は誕生
の日にしてはじめての記述
も残されてある。
生き続けたい。だが、死
んではいかねばならない自
分。それを見据え「明日」
という字を書いて偲ぶが
者。彼の来し方を重ねなが
ら、こみあげている。

が、こみあげている。
たまたま、彼の生家が、
私の住む大阪・吹田市内で
あったことか、私は彼の
墓を探しあて、墓詣をした。
近年、戦犯とされた彼の
死を深く掘り下げた加古陽
治編著『真実の「わだつみ」』
(東京新聞)、木村氏の上
官だった驚見
豊三郎氏によ
る『或る傍觀
者の記録』(同)が刊行さ
れ、彼にあらたな光が投げ
かけられてくる。

読書術の遅れ半歩

「わだつみ」に別の遺書

際立つ戦争の不条理



津川雅彦さん受章
防災に在るの報告
なでしこリム受
おねしょに悩む前に

20 18 15 9 3 2
24.25 28
新緑の地、38人が遺棄された
あつた。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

恩師編集集今の形に

学徒兵木村久夫 処刑直前残す

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」の遺書は、死の
念を込めて書かれた。戦
場の惨状を、生きたまま
に描き写した。その心は、
『わだつみ』という
『日本戦没学生』と
『学徒兵』と

「わだつみ」木村久夫の遺書

敗戦から六十九年、日艦沈没として処刑された哲学者・木村久夫の「もう一つの遺書」の全容が明らかになった。

恩師「何巻の書物にもまさる」



特別な存在

「死の数日前、突然この書を手に入れた。死ぬ前にもう一度これを読んで死に就こうと考えた」
ビスケットの箱で補強された「哲学通論」に書かれた木村の遺書は、扉に書かれた木村の遺書から始まる。シンガポール・チャナン刑務所の獄中で、看守からもらった鉛筆を使って、余白に書き連ねていった。死

2通合わせ 思い伝える

木村久夫の遺書のどこが変わったか

日本の軍人、ことに陸軍の軍人は、私たちの予測していた通り、やはり国を亡ぼしたやつであり、すべての虚飾を取り去れば、我欲そのものほかに何もかもなかった。
（見るに堪えない）軍人を代表するものとして東条（英機）前首相がある。さらに彼の経験において自裁は明らかなことか、無責任なることだしい、これが日本軍人のすべてであるのだ。
「天皇の命」と彼らの言うのはすなわち「軍閥」の命と違うのと実質的には得らなかつたのである。ただこの命に従わざる者を罪する時にのみ、天皇の権力というものが用いられたのである。もしこれを聞いて怒る軍人あるとするならば、終戦の前と後における彼らの態度を正直に反省せよ。
もしも人々のいうようにあの世というものがあ

- 木村久夫が撮影した恩師・塩原公明。2人は強い絆で結ばれていた
- ビスケットの箱で補強された「哲学通論」には、扉のページからびっしりと書きこみがされていた

刑を「運命の命する」とい
と受け入れ、敗戦と判つて
いながうの戦を起した全
部を批判・暴走を許した「全
日本国民の責任に燃れ、わ
が国を根本から変革」する
「若き学徒に期待を寄せる
不条理に」泣きたくなるこ
とがある」と狂露する。
と云うが、家族や故郷への
思いや終戦の歌、遺言を含む
「わだつみ」後段の四分の一
は、「もう一つの遺書」の記述

だつた。前後をへれ替えたり
表現を強めたり、削除したり
する編集の跡が多数あった。
誰が、何のために編集した
のか。カギとなるのは、木村
の旧制高校時代の恩師で思想
家の塩原公明だ。
遺書は一九四八（昭和二十
三）年、塩原が「新報」誌に
「或る遺書について」を寄稿、
初めて紹介した。木村は塩原
の影響で学問に目覚め、京都
帝大に進学。その後も折に触
れ、進路のことなどで相談し
ていた。遺書でも特に塩原の
名を挙げ、「遺書は全部塩原
先生の手を通じて高等学校に
寄贈してくれ」と記すほど慕
い、塩原にとっても木村は特
別な存在だつた。

最後の歌が抑えられ、
「わだつみ」は「従容」として死
を受け入れたという故人の
イメージが壊れると考えた
可能性がある。

「天皇の命」と彼らの言う
のすなわち「軍閥」の命
と違うのと実質的には何ら
変わらなかつたのである。
ただこの命に従わざる者を
罪する時のみ、天皇の権
力というものが用いられた
のである。
もしこれを聞いて怒る軍
人あるとするならば、終戦
の前と後における彼らの態
度を正直に反省せよ。（1
13、115頁）

核心

整理と配列

そうした事情を知る遺族
は、遺書が短く、塩原に連絡
塩原は、遺書の内容が書かれ

た手紙を「涙をこぼしなが
ら」（木村の父への手紙、読
んだ。さらに「彼が若き命を
すてて書いた」の一片の遺書
は何巻の学問的書物にもまさ
る価値をもっている」（四）
と考え、後に木村家を訪れて
「哲学通論」の書き込みを筆
写問わす（或る遺書につ
いて）を発表した。その際
文中に「凡そ」（哲学通論
の書き込みの中から引いて
きたもの）と記すが、実際は
二つの遺書が含まれていた。
塩原は複製した木村の父宛
てに出した手紙で「私の紹介
や感想を伝え、遺書の中の最
も興味深々と思われる部分
についてもほとんど全部を整理
して掲載」列したと認
めていた。

高位高貴の人々もその官
位を取り去られた今日にお
いては、少しでも多量に享受せ
んと、見栄を外聞も考慮でき
ない現実をまざまま見せつ
げられた時に、おいては、
全く取り返しのつかない皮
肉さを痛感するのである。
精神的あり、また、た
るべき高唱してきた人々
のいかにその人格の賤しき
ことを、我、日本のために
唱禁す能はず。（12
5、127頁）



学生時代の木村久夫。恩師・塩原公明と出
会って学問に目覚めた。撮影場所不明

戦後学徒の遺稿を集めた「きけ わたつ
みのこえ」を代表する元陸軍上等兵・木村
久夫（一九一八～四六年）の遺書は、すべ
て哲学者の余白に書かれたものだとされて
きたが、実は別にも存在していた。ここに
「もう一通の遺書」の全文と、わだつ
みでは削除された「哲学通論」の書き込
みの抜粋を紹介する。

全体を現代仮名遣いに改
めた。原文は大部分が漢字
とカタカナだが、カタカナ
は外来語を除いてひらが
なとした。高貴、高貴や
その仮名を挿入し、段落冒
頭の一字だけ、改行を加え
た。指示代名詞など一部の
漢字をひらがなとし、明
かな誤字等は修正した。

「哲学通論」書き込み 削除部分抜粋

「哲学通論」への書き込
みのうち、「きけ わたつ
みのこえ」で削除された主
な箇所は以下の通り。
日本の軍人、ことに陸軍
の軍人は、私たちに予測し
ていた通り、やはり国を亡
ぼしたやつであり、すべて
の虚飾を取り去れば、我欲
そのものほかに何もかも
もなかった。（25頁）
大東亜戦以前陸軍軍人
の態度を見ても容易に想像
されるところであつた。陸
軍軍人は、あまりに俗世に
乗り出しすぎた。彼らの常
々の広言にもかかわらず、
彼らは最も賤しい世俗の権
化となつていたのである。
それが終戦後、明瞭に現れ
てきた。生物学的に劣った
のは陸軍軍人であつた。
（27頁）

軍人 正直に反省せよ

（連合軍軍人看守から）
全く不合理と思ふことが
が、日本では平然と何の反
省もなく行われている。（27
頁）

を幾多指摘されるのは、全
く日本に取つて不寛容なこ
とである。彼らがわれわれ
と異なる点とは決して
言われないが、真赤な不合理
が平然と横行するまじし
て来たのは、何と云つても
われわれの赤面せざるべか
らざるどころである。
単なる憐れといふことか
らだけでも、われわれ日本
人の文化的水準が低とせ
ざるべからざる諸々の面が
思い出され、また指摘され
るのである。
ここに軍人社会、および
大言壮語にかかわらず、本
質は古い中世的なものの
ものにほかならなかつた。
とは、反省し全国に平等
低頭、謝罪せねばならぬと
云ふのである。（50、61頁）
（5）（見るに堪えない）
軍人全代表するものとして
東条（英機）前首相があ
る。さらに彼の終戦におい

留守担当 大阪府吹田市大字佐井寺 四〇二九 父 木村久夫 (注①)

若き命よさらば

出典代であったら、思いだすに足らないものがある。新屋敷の家、講義、高等学級(注②)、堺町、狩野(注③)、思はれは走馬燈のよう(注④)と走り論(注⑤)。

木村は生前「哲學通論」の持ち主だった元上官に「うさぎ」を渡した。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。

遺書 一、遺書 一、英和辞典(これは倉庫にある背裏の中にあり、これは内地より持ってきた唯一の品なるをもらって下さるだけ)配慮(たぐ)。

「せめて一冊の著述でも出来得るだけの時間と生命が欲しい」。戦犯に問われ、無実を訴えながら刑死された元陸軍上等兵・木村久夫。刑場に連れ出される直前まで書いた「最後の遺書」に家族や故郷への思いとともに記されているのは、学園の道を絶たれる無念だった。戦地でも学術書に肌を、通訳のかたら本を讀み続けた。

「堀尻(公明)先生の一分と愛情の問題」他にも「冊入手出来れば早く送ってくれ。死ぬ迄に是非一度読みたい」と願っている。どんな本でもよい、新刊物の経済の本を送って、とぞんたのむ。

旧制高知高校(現高知大)時代に恩師・堀尻らの影響で学問の道に進む。堀尻の「南洋の原住民は仲々可愛」に目覚め、京都帝國大経済学部に入

所属部隊 第三十六旅團 野部隊花岡隊 留守担当 大阪府吹田市 大字佐井寺 木村久夫 遺書 木村久夫

「せめて一冊の著述でも出来得るだけの時間と生命が欲しい」。戦犯に問われ、無実を訴えながら刑死された元陸軍上等兵・木村久夫。刑場に連れ出される直前まで書いた「最後の遺書」に家族や故郷への思いとともに記されているのは、学園の道を絶たれる無念だった。戦地でも学術書に肌を、通訳のかたら本を讀み続けた。

旧制高知高校(現高知大)時代に恩師・堀尻らの影響で学問の道に進む。堀尻の「南洋の原住民は仲々可愛」に目覚め、京都帝國大経済学部に入

木村は生前「哲學通論」の持ち主だった元上官に「うさぎ」を渡した。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。

いまだ三十歳に満たぬ若き生命を捨てた。父母に遺書を残すの不幸をお詫びする。いよいよ私の刑が執行されることになった。絞首による死刑である。戦争が終り戦火に死ななかつた生命をここに置いて失ってしまうのは惜しみて余りある。だが、これでも大き世界歴史の転換点と国家のために死んでいくのである。よし、両親は、私は敬愛に

木村久夫 「もう一通の遺書」全文

木村久夫 「もう一通の遺書」全文

大きな運命 一人ではないかんともしえない

「わだつみ」悲劇の学徒兵 木村久夫

無実訴え「戦犯」処刑



「わだつみ」悲劇の学徒兵 木村久夫

学びの思い 最期まで



心召後、病を得て大阪の陸軍病院に入院中の木村久夫。1年近く療養した後、インド洋のカーニコバル島に配属された。

「せめて一冊の著述でも出来得るだけの時間と生命が欲しい」。戦犯に問われ、無実を訴えながら刑死された元陸軍上等兵・木村久夫。刑場に連れ出される直前まで書いた「最後の遺書」に家族や故郷への思いとともに記されているのは、学園の道を絶たれる無念だった。戦地でも学術書に肌を、通訳のかたら本を讀み続けた。

旧制高知高校(現高知大)時代に恩師・堀尻らの影響で学問の道に進む。堀尻の「南洋の原住民は仲々可愛」に目覚め、京都帝國大経済学部に入

木村は生前「哲學通論」の持ち主だった元上官に「うさぎ」を渡した。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。故郷の母を想へば涙は止まらぬ。